

# 「自主保育」の意味と現在

——しんぼれん調査報告——

元森絵里子

## I. はじめに—自主保育とは・しんぼれんとは

自主保育とは、施設保育に頼らず、母親たちが自分たちの手で子育てを行う活動である。現在では類似の育児サークルも少なくないが、自主保育の特徴は、①母親同士で当番を決めて預け合いを行う点、②冒険遊び場や公園など野外で行う点、さらに、③幼稚園に通わせることなく就学前まで活動を続ける点である<sup>1)</sup>。

自主保育は、1970年代半ばに始まった活動であるが、新しい保育を考える会[1983:31-33]によると、その源流は2つに分けられる。

第一は、「子どものため」に端を発した「おひさまの会」の系列である。小児科医の毛利子来氏や石川由喜夫氏らが、現代の都市環境や管理教育からの「子どもの解放」を目標とした地域保育の運動として、1973年に青空保育グループ「おひさまの会」を作った。それが分裂して、1976年に「駒沢おひさま会」(駒沢公園)、1977年に「原宿おひさま会」(代々木公園・渋谷区)が誕生する(毛利[1977])。

第二は、「女性のため」から始まった「ひろば」(羽根木公園)の系列である。子育て中の「女性たちの解放」をめざした地域保育の全国ネットワークである「あんふあんて」のメンバー矢郷恵子氏が、自身の出産を機に、区報に「おひさまの下で子育てしませんか」と呼びかけて、1976年に自主保育を始める。さらに、初期メンバーの子どもの幼稚園入園時期を機に、「自主幼稚園」としての活動を行い、1979年の羽根木プレーパークの開園以降はそこを活動拠

点にするなど、その後の自主保育の形のモデルケースとなっていく。

このように、異なる思いと目的を持って別々に誕生した自主保育だが、徐々にその目的の違いを超えて、「自主保育」としての共通項を作り出し、連携していくようになる。1980年12月、自主保育をやっている他のグループに気づいた矢郷恵子氏が、世田谷区を中心とした8つの自主保育活動グループの連絡会「しんぼれん(正式名称:新しい保育を考える会)」を結成した。「行政もグループの存在を把握していない時代、民間グループの地域ネットワークとしては初の試み」(矢郷恵子氏)であったという。

このしんぼれんの存在により、「自主保育」は、個別の活動にとどまらず、共通の形を持った「運動」の性格を帯びるようになったといえる。そして2002年12月現在、世田谷区5グループを含む、東京、神奈川の15グループがしんぼれんに参加し、活動を続けている。

## II. 本稿の目的と調査の概要

子育てをめぐる公的な支援は、エンゼルプラン以降、様々な角度から行われるようになっていく。だが、それ以前に、民間レベルでは、子育てや子どもを対象とする活動は起こり、脈々と続いている。自主保育は、そのような民間の活動の代表的な1つであり、全国的に広がるような影響力を持った活動である。したがって、世田谷の子育て支援は、このような民間の動きを抜きにしては語れないように思われる。にも

かかわらず、自主保育に関する学術的研究は、卒業論文レベルを除けば少ない。マスメディアが取り上げたり、担い手の側が発信したりということは少なくないが、単なる事例紹介や根拠のない礼賛のレベルにとどまっている<sup>(2)</sup>。そこで、本稿では、自主保育の子育て活動としての位置を把握することを目的として、自主保育が持つ民間の子育て運動としての意味、すなわち、その魅力と可能性、困難を検討する(Ⅲ、Ⅳ)。さらに、自主保育の現在を展望する(Ⅴ)。

なお、本稿は、2002年度に行った、以下の一連の調査結果に基づいている<sup>(3)</sup>。

- ・「サークルの特徴についての予備アンケート(以下、グループ調査)」…しんぼれん加入15グループを対象とした、活動内容調査。12グループより回答を得た。
  - ・「自主保育参加者の子育て意識アンケート(以下、意識調査)」…世田谷区内で活動する4グループの協力を得て行った、個人単位の意識調査<sup>(4)</sup>。58名に配布し、40名より回答を得た。
  - ・しんぼれん代表矢郷恵子氏他、各グループの初期を知るメンバーへの聞き取り調査
  - ・関係者提供の発足時より現在のレターを中心とした、しんぼれん発行文書の検討
- 各調査の詳細な報告は、最終報告書を参照いただきたい。

### Ⅲ. 自主保育の魅力と可能性

先行研究や当事者の語りによると、自主保育の背景には、密室育児と育児不安、遊び場の不足や都市の育児環境としての貧困、管理主義化する公教育、の3点に対する問題意識がある(西村[1984]、毛利[1977]、しんぼれんレター)。そして、自主保育の実践では、預け合い・野外保育・就学前までという3つの柱が掲げられている。

論理的に考えると、これらの3つの問題意識

は、1つに合流する必然性はない。また、3つの柱に結実する必然性もない。しかし、結果だけ見れば、自主保育の3本柱の中で、3つの問題意識が解決されていることがわかる。つまり、就学前までの預け合いによって、母子を密室から解放し、母に自由時間をもたらすと同時に、公教育とは違った子どもへの働きかけが可能になる。さらには、施設任せにせず自分の手で育てるということも可能になる。また、野外保育によって、自然の中でのびのびと遊ばせることができる上、管理主義的な保育を回避できる。

結局、自主保育の思想が論理的に組み立てられて、必然的に実践の形が定まったというのではなく、たまたまいくつかの関心(の束)を持っている人々が集まって、そのニーズに合わせて形作られてきた活動だということであろう。しかし、30年にわたって続いてきたということは、この形が、参加者にとっても、活動そのものにとっても、何らかの魅力があったということである。それがどのようなものだったのか、また、そこから展開する自主保育の可能性は何かを検証したい。

#### Ⅲ.1. 参加者にとっての魅力と可能性

参加者にとって、自主保育という子育ての形はどのような魅力を持っているのだろうか。意識調査において、「自主保育の魅力やよかったこと」を自由回答で尋ねたところ、「こどもを自由に遊ばせてあげられる」「異なる年齢の子といっしょに遊べる」「自然に触れられる」「皆と本音でつきあえる」「母親同志の信頼関係がある」「子供も母も成長します」など多様なものがあがった。それぞれを個別に取り出してみれば、必ずしも3本柱がそろわなくてはならないような「魅力」はない。

にもかかわらず、なぜ皆自主保育に惹かれるか。注目すべきは、いくつもの魅力を同時に語る人が多いことである。つまり、自主保育の3

本柱をがんばると、上記のような満足がすべて得られ、関心の束がすべて満たされる可能性があるのである。自主保育の第一義的な魅力は、理念や論理といった次元にではなく、結果的に母子に多方面で充実感を与える、「実践のパッケージ」を作り上げたことにあるといえるのではないだろうか。

また、それを支えるのは、濃密なコミュニケーションであると思われる。上記自由回答でも、「皆と本音でつきあえる」「大人同士も、希薄な表面上のつきあいじゃなく、心身ともに助け合い」「子どもへのまなざしが近い人といっしょに子育てできるので楽」と、母親同士のつきあいが、価値観を共有した者同士の親密で密度の濃いつきあいであることをあげた人が少なくない。活動のあり方に論理的には必然性がなく、「自主保育」が「自主」である以上、参加者が討議の過程で問題を共有することは、活動に必要不可欠である。そして、その過程で「時には、ケンケンガクガクもあったりして…それも又良し。他にそういう機会も場もない」（上記自由回答）と、互いの信頼を高め、それを通してさらなる充実を得ていくのである。

また、「主婦はどちらかというと家庭という自分ひとりの決定で動いていく世界の中ですごして、自分の価値観がすべてになってゆくが、自主保育とかかわったことで他人の考えや外の世界に目をむけられて良かった」（同上）というように、コミュニケーションを通じた価値観の広がり言及する人が少数ながらいる。濃密なつきあいと手作りの活動の中から、個人のそもそもの関心を超えて、母親が新しい活動へと展開していく可能性も出てくると思われる。レターを見ると、しんぼれんの活動自体、代表の矢郷氏の関心の広がりに伴って、当初の単なる連絡やノウハウの伝達から、行政への支援の訴え（80年代半ば）、まちづくり（80年代後半）、子どもの遊びの問題（90年前後）へと

展開した様子うかがえる。もちろん、現役の母たちには、そこまでの展開は望みにくいかもしれないが、次のステップへの可能性は開かれているといえよう<sup>6)</sup>。

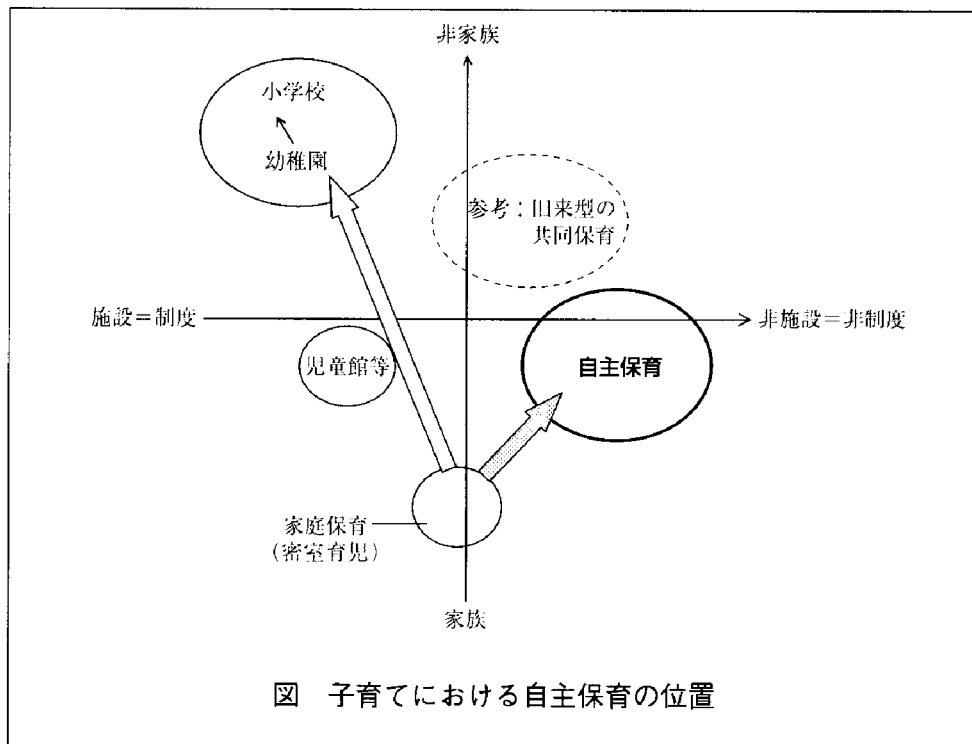
### III. 2. 運動としての魅力と可能性

次に、活動全体として、どのような魅力と可能性を持っているのかを、現在一般的な子育てのあり方である、家庭保育から施設保育・教育へというルートとの比較を通して検討したい。

子育て、保育というと、とかく家族か施設かの二分法で語られがちである。しかし、少なくとも自主保育を見るにあたっては、施設か家族かの二分法は自明ではないように思われる。そこで、家族の軸（家族／非家族）と施設＝制度<sup>institution</sup>の軸（施設＝制度／非施設＝非制度）の2軸を独立のものとして設定して、比較の際の枠組みとしたい（図）。家庭での母子密室状態の育児を、家族軸上の家族よりとするならば、家庭から引き離して施設＝制度の側へと子育ての主体を移行させていくというのが、現代日本において一般的な子育てのあり方だろう。

これに対して、自主保育は、まず、施設との関係でいえば、義務教育を受けることまでは否定しないが、就学前までは幼稚園に通わず自分たちで保育する。つまり、幼稚園を施設＝制度であると捉えるならば、専門家に任せず自分たちの手でという自主保育は、まさに非施設＝非制度である。また、象徴的な意味でも、園舎を持たず野外でという活動形態は、非施設といえよう。

次に、家族との関係でいえば、密室状態からの解放が目指され、預け合いが行われている。しかし、一方で、専門家任せ、他人任せを嫌うように、あくまでも家族が関わる必要ということも自覚されている。意識調査においても、「子育てにはなるべくいろいろな人が関わるべき」に対して「賛成」ないし「やや賛成」と答えた



人が34名（85.0%）であると同時に、「子育ては家族中心であるべき」に30名（75.0%）が「賛成」ないし「やや賛成」と答えている。つまり、フィールドワーク中で何回か耳にした表現だが、「家族を核にしてみんなで子育て」という意識が強いようである<sup>9)</sup>。

以上をまとめると、自主保育は概ね「家族」かつ「非施設=非制度」に位置づけられる。

このようにして見ると、自主保育は、既成の子育てのほぼ対極に位置する活動であることがわかる。これは、私的領域に閉じた家庭保育とも、「公」の領域へと制度化された既成のルートとも異なる。「地域」で共同した子育て、いわば「共」による子育てという新しい領域を示してはいないだろうか<sup>10)</sup>。自主保育がなぜ魅力的で、「新しい保育」としておおげさなまでに評価されるのか。それは、一般的な子育ての対極に道を開いたからであり、それが「共」による保育という新しい可能性を秘めているからではないだろうか。そして、そこで生まれた活動から、地域社会の創造へと関心や活動が発展し

ていく可能性も、潜在的には持っているだろう。

#### IV. 自主保育の構造的困難

このように、魅力と可能性を持っている自主保育だが、レターを見ると、しんぼれんの初期より一貫して、参加者が増えないことや、預け合いに移行せずに辞めてしまう人がいることが、問題視されている<sup>11)</sup>。そもそも論理的必然性がいまいな活動であることを考えると、その理念や活動形態は、高い説得性を持つものでも、万人に共有可能なものでもないもので、共感しない層が存在してしまうことはやむをえない。だが、それに加えて、前章で見た魅力と表裏一体に、構造的な困難もあると考えられる。第一に、一般的とされる幼稚園に対して対極にあるということは、心理的に敷居が高かったり、周囲の反対に直面したりすることが多いということである。第二に、自主保育の魅力であるコミュニケーションの密度の濃さを、逆に負担に感じる人がいることも否定できないだろう。ま

た、第三に、預け合い・野外保育・就学前までという活動のあり方自体が、文字通り負担である層がいることも事実だろう。意識調査では、現在の自主保育参加者の実に7割強が「現金収入を伴う仕事をしていない」と答えており、完全な専業主婦である。

さらに、参加した人の内部でも、自主保育の論理がそもそも複数の関心の束によっていることを考えれば、関心の強さと負担や心理的抵抗感との兼ね合いで、自主保育の3本柱をすべてこなさなくてもよいと考える層が出てくることはやむをえない。「自主」である以上、預け合いではなくてもよい、幼稚園にも行かせたいという考えを抑圧するのは難しい。自主保育は構造的に不安定さを抱え込んでいるのである。

## V. 自主保育の現在

以上に見てきたように、いくつもの魅力と困難を抱えながらも、自主保育は続いてきた。自然の中での子育てや母親同士の密接なつながりに共感する層は、これからも一定数いるだろう。だが、90年代、特に半ば以降、自主保育が「転機」を迎えているという言説が内外に存在する。実際にも、活動の量と質の変化は見受けられる。

まず、世田谷では、預け合いやグループ自体が存続しないほどに、参加者不足の問題が深刻化している。一時期は12、3はあった区内のしんぼれん加盟グループが、次々と活動を停止し、2003年3月現在で5グループとなっている。そのうち2グループが「活動の問題点」「グループ一番の問題」として「メンバー各々事情があり、来年度は幼稚園へ進むので（3才児5人）、存続が難しくなっている」、「人数不足（いままでたくさんいたが（おおくて20人くらい）来年が1人しかいなくなってしまった）」（グループ調査）と、人数不足による存続の危機を語っているし、もう1グループも、「預け合い人数の減少。上の学

年（年中・年長）が現在いない」（同上）と、預け合いへの移行者の減少を問題視している。

その理由として、しんぼれんでは、少子化（世田谷における子育て世帯の減少）と三年保育の浸透を考えているが（矢郷氏）、前章の分析と重ね合わせると、この要因は大きいと思われる。母集団が減れば、それだけ潜在的参加者が減る。さらに、参加者が減った上に、「一般」のルートの「正統性」が強調されれば、自主保育の「特殊性」が印象の上で高まり、敷居が一層高くなると考えられるからである。

それに加えて、子育て世代の意識において、対抗運動として自主保育を捉える視点が希薄化してきたこともあげられよう。初期の担い手たちが、公的保育・教育への批判や、女性の社会参加という意義を繰り返して語るのに対して、現在の参加者で参加の動機として「既成の幼稚園に疑問を感じて」をあげたのは5名（12.5%）、「お母さん自身の社会活動の場がほしかった」は2名（5.0%）にすぎない<sup>(9)</sup>。このような強烈な目標がない場合、参加のきっかけは、かなり細分化された具体的な目標によることになる。すると、必ずしも3本柱をがんばらなくとも、自分たち母子の目標は達成されるというケースが多くなるだろう。

また、近年は特に、公的支援によりサービスの選択の幅が広がったことも、関係しているだろう<sup>(10)</sup>。それ自体は、行政が「共」による子育ての下支えに参入したことを意味しており、必ずしも悪いことではないが、以前の世代には「生活のすべてだった」自主保育に、「色々あるうちの1つとして、という人が増えている気がする」、「自主保育だけか育児サークルだけか（という二者択一）ではなく、これからはよいところどりになっていくかもしれない」（OB）という変化を、もたらしているとも考えられる。

つまり、「転機」が意味するのは、少子化と三年保育の浸透で参加者が減る中で、自主保育

が構造的に抱える、参加者の関心の多様性と「自主保育」という形の維持との兼ね合いという問題が、さらに先鋭化するというのではないだろうか。しかし、たとえ、それが万人向けのものではないにしても、自主保育の魅力、可

能性の部分の意義は小さくないように思われる。世田谷で芽生えた動きを、個々のグループが、しんぼれんが、そして、区レベルがどう支え、継承していくかが、今問われている<sup>(11)</sup>。

註

- 1.このような活動には、高度成長期に、女性の働く権利の獲得を目指して保育所増設運動をしつつ、母たちが共同保育をしたという前史が存在する。しかし、本稿で扱う「自主保育」は、必要に迫られたというよりも、むしろ現代社会への批判意識に端を発した、子育て形態の模索という側面が強かった。
- 2.肯定的な言説は、第一に、施設保育・教育の問題に対抗する試みとして、第二に、現代社会で母子の抱える問題に対する希望を与える活動として、第三に、まちづくりや子どもの遊びについて発信している社会集団として、新しい可能性を持つ子育てのあり方と評価する。
- 3.2度のアンケート調査（グループ調査と意識調査）は、野田潤との共同調査である。本稿の議論においても、野田の分析に触発されている部分が多い。
- 4.ご協力いただいたのは、以下の4グループである。

表1 意識調査協力グループ一覧

(2002年10月現在)

		自主ようちえんひろば	自主保育駒沢おひさま会	自主保育てんとう虫	自主保育ぺんぺん草
活動	場所	羽根木プレーパーク	駒沢公園自由の広場	世田谷プレーパーク	駒沢はらっぱプレーパーク
	活動日	月～金（日：行事）	火木金	水金（火：3歳以上）	水金
人数	0～1歳	8人	2人	1人	2人
	2～3歳	2人	6人	12人	5人
	4～6歳	18人	3人	1人	0人
	母親	21人	9人	12人	6人
	保育者・OB	4人	1人	1人	0人

グループ調査回答より作成

- 5.経験的には、教育や子どもの問題に展開する人と、女性の生き方の問題へと展開する人の、2パターンに分かれるという（矢郷恵子氏）。
- 6.ただし、「家族を核にしてみんな」でというときに、当事者のイメージは、家族を一枚岩なものとして維持することと、他の家族へと家族のユニット自体を開いていくこととを両極にして、その間の地点を揺れ動いていると思われる。厳密にどちらにどの程度重心があるかは、家族やグループによってはもちろん、時代によっても変化していると思われる。特に、Vで見えるような近年の変化を考えると、家族というユニットを強く維持する方向へという変化が読み取れるようにも思われる。本稿では、現在の意識調査から、自主保育を「家族」の側に分類したが、自主保育における「家族」イメージとその変化の問題は、現代社会における「家族」という言葉の揺らぎとも関係しており、それ自体考察すべき問題であろう。
- 7.ここでいう「地域」とは、空間的な概念ではなく、人と人のつながりからなる、いわば選択縁としての地域社会で

ある。

8. 自主保育において、預け合いを行うのは幼稚園の年少組に相当する年齢の子どもからで、それ以前は母子参加が原則である。預け合いに進むか、二年・三年保育で幼稚園に進むかという選択は、個々の母親にとってもグループにとっても常に大きな問題であった。
9. 具体的には下表参照。

表2 参加の動機 (N=40)

子どもをのびのび遊ばせたかった	35 (87.5%)
子どもに友達をつくりたかった	27 (67.5%)
お母さん自身の友達をつくりたかった	20 (50.0%)
お母さん自身の社会活動の場がほしかった	2 (5.0%)
子育てに関する情報を交換する場がほしかった	10 (25.0%)
既成の幼稚園に疑問を感じて	5 (12.5%)
自主保育を通して地域とつながりを持ちたかった	2 (5.0%)
その他	8 (20.0%)

意識調査回答より作成

(複数回答)

10. 世田谷区では、社会福祉協議会による「ふれあい子育て支援事業」や「子育てサロン事業」が行われており、子育て世帯を地域で支える仕組み作りが進められている。また、「措置から契約へ」という一連の福祉構造改革の流れの中で、民間業者も様々な形でこの領域に参入してきている。
11. 自主保育を支援する際、個々の母のニーズと自主保育という活動のニーズは、本来別の問題であるということに留意する必要がある。参加者のニーズにおいて、自主保育の果たす役割が一面的なものになりつつあるからである。ちなみに、グループ調査によれば、グループの要求は、金銭援助、活動場所の保証、広報機会の拡大の3点に集約される。支援するにせよしないにせよ、このレベルで考える必要がある。

## 文献

- 新しい保育を考える会(1983)『この街で育て：自主保育10年の歩み』.
- 新しい保育を考える会(2000)『自主保育のすすめ』.
- 毛利子来(1977)『いま、子を育てること：小児科医の自分史から』筑摩書房.
- 西村絢子(1984)『母親の子育てと共同保育』あゆみ出版.
- 西村絢子(1988)「地域における子育てと親の参加：自主保育とプレイグループ」『日本の社会教育』32:108-119.
- しんぼれんレター(1980年12月～2003年3月分).
- その他しんぼれん発行のピラ等.